

## 詩としてのロシアのなぞ

(Д. Н. Садовников編の『ロシア民族のなぞ』の翻訳紹介)

貝 沼 一 郎

ロシアのなぞは主として詩である。<sup>1)</sup>

——В. П. Аникин

ムジークの伝統はロシア生活に、習慣や風俗に、言語に、文学と芸術に、いまなお非常に大きくあらわれている。

——I. ドイツチャー<sup>2)</sup>

(日本の) なぞの研究は同時に日本人の研究である。<sup>3)</sup>  
——戸板康二

ドミートリイ・ニコラエヴィチ・サドヴニコフ(Дмитрий Николаевич Садовников, 1847-1883) 編の『ロシア民族のなぞ』(ЗАГАДКИ РУССКОГО НАРОДА, 1876, С-ПЕТЕРБУРГЪ) は編者の時代までのロシアの農民間に伝えられて来たなぞなぞを蒐集し、これを「住居」、「家庭生活」、「着物と服飾品」、「食べものと飲みもの」、「畑」、「畑仕事」、「動物」、「自然現象」、「身体」、「生と死」その他の25の大項目に分類配列したものである。

なぞとは言うまでもなく、事象をそれを直接に言いあらわすコトバではなくて、別のコトバを用いて、すなわち、比喻によって表わすか、またはその事象を初めて見たという設定のもとに描写することにより、故意にそのものの本体をかくし、聞く者の理解を困難ならしめようとした一種の間である。

なぞは今日では多く子供のコトバ遊びの具となってしまったが、しかしなぞの前述の性質から、古い時代にはタブー(禁忌)に替るものとして用いられたり、呪術的意味に使われたものもあったし、さらにまた若い人たちの頭脳を訓練し、人生智を与える手段としても利用されたのである。

『ロシア民族のなぞ』にはこのようななぞなぞが4,000以上もおさめられている。そしてこれらのなぞは少数のものをのぞき、すべてロシア農民(ロシア国民と言っ

てもいい)の言語による創造物である。農民は生き、働いてゆく毎日毎日において自分たちの周囲にある事象、住居、日用品、生産用具、家畜、野や畑、山や川、そして降る雨、流れる雲などの自然現象に接し、また労働作業の折々に、ある日いだいた感懐をなぞの形式に託することが多かったのである。

本書を通読して私がもっとも強く感じたことは、これらのロシア農民のなぞには詩精神(ポエジー)があふれていることであった。ここではもはやなぞは単なるコトバの遊び、呪術用文句ではなくて、それ以上のものがある、ロシア農民の、帝制時代のロシア農民—庶民の、抒情と叫びがある、と思った。(ロシアのなぞがほとんどすべて韻律をもち、「詩の表現に必要な言語の特性のひとつとして代表的な比喩」<sup>4)</sup>や対句法によって表現されていることはここでは問わない。それは参考のために添えられた原文によっておのずと知られるであろう。)私はルナアルの『博物誌』(Jules Renard, “Histoires Naturelles,” 岸田国上訳)を思った。『博物誌』においてフランスの農村生活、とくに家畜や樹木、草花、動物たち、を暖かく、せんさいにしかもユーモアとペーソスをこめて簡潔にうたいあげたフランスの詩人・小説家ルナアル(1864-1910)の眼に通ずるものを帝制ロシアの農民の眼に見たように感じた。

「ロシアのなぞは主として詩(ポエジー)である。なぞは見え、感じられるもの、人間の全感覚によって知覚される現実生活、の美しさをひらいて見せてくれる。なぞは人間の手が作りあげた数千のすばらしい物品やまたわれわれをとりまく世界のポエジーを理解することを教えてくれる。なぞは事物または現象の詩的な奔放な描写である。サドヴニコフのなぞ集は農民の審美的世界がどんなものであったかをはっきりとわれわれに示してくれる」と言うヴェ・ペー・アニキン(В. П. Аникин)の言葉はまさに真実であると思った。

私が本書の紹介を考えたのもこのためであった。

しかしながら「ロシア農民の日常生活環境と世界観を明らかにするため」(編者サドヴニコフの自序)に編纂されたこのなぞ集がたんに「詩的な」、「牧歌調の」なぞばかりを集めているのでないことは言うまでもない。ここにはロシア農民—ロシア国民の人生の哀歓を、人間観を、自然観を、世界観を、うかがうに足るなぞがひじょうに多い。それはまたそれでもことに興味ぶかく、貴重でもあるのだが、ここではまず「詩(ポエジー)としての」なぞのいくつかを主として紹介するにとどめる。紹介にあたってはたとい美しいなぞでもわれわれのイメージには容易に浮び難いもの、例えば、ロシア農民の古い農作業方法、農作業具、生活用品それに養蜂場

と養蜂作業および機織り等々に関するものはのぞいた。原著のおびただしいなぞの数に比べればここに紹介する150ばかりのなぞはほんのその一端にすぎない。

なお「なぞ」が昔しの、帝政ロシアの農民生活にかかわるものが多いだけに、現代人、とくにわれわれ日本人、にとっては生活環境、風習等の相違でわかりにくいものが多いので、そのようななぞには解説をつけた。解説はV. П. アニキンの原著に対する註釈を基礎とし、それに補足的に訳者の説明を加えたものである。

本稿の底本には『ЗАГАДКИ РУССКОГО НАРОДА (СБОРНИК ЗАГАДОК, ВОПРОСОВ, ПРИТЧ И ЗАДАЧ). Составил Д. Н. Садовников』(1959年モスクワ大学出版部)を用いた。この底本はV. П. アニキンが原著をなぞの配列の順序を多少変更し(原著の「補遺」に収められたなぞを本文中の各項目に組み入れた)、また《真に民族のなぞとしての性格をもたないもの、たとえば、宗教をテーマとしたもので民族の自由な考え方、宗教に対する批判を表わしていないもの》、《印刷に付するのをはばかるようなもの》をのぞくなどして監修し、それに長文の解説的序文と詳細な註釈(編者サドヴニコフ自身の註釈を全面的に考慮にいれて)を施したものである。

本稿のなぞの本文の左上端に数字となぞの「解」を括弧に囲んで示してあるが一例: 1. (斧), 一数字は訳出したなぞの本稿における順番を示すものである。また「解」を示すコトバはなぞの解答というよりはむしろ詩としてのなぞの題と見るべきであろう。

原著にはなぞを採集した場所(ロシアの県、郡、村などの名称)をいちいち明示してあるが、訳文には省略した。またなぞの分類配列の基準としてある大項目(たとえば、「住居」、「畑」、「自然現象」などの項目)も省略した。

なお原著者サドヴニコフの生涯を以下に略述する。

### デ・エヌ・サドヴニコフの生涯

ドミートリイ・ニコライヴィチ・サドヴニコフは1847年ヴォルガ河畔のシムビルスク市(現在のウリヤノフ市)に貧乏貴族の子として生れた。幼少にして父母に死に別れたが、叔母のもとで育ち、死んだ父の蔵書で勉強し、とくに文学と自然科学を学んだ。また語学が好きで、ことに英語が得意であった。自然科学に興味を抱いていた彼はやがて人間生活の自然科学的根拠を知ることが主要なテーマとするようになった。1867年にモスクワに出、68年に自作の詩とロングフェローの訳詩を発表

して文筆活動に入った。1874年『わが開拓者たち（シベリヤ植民物語）』《Наши землепроходцы (рассказы о заселении Сибири)》や「沿ボルガ地方の人種誌学資料」《Этнографические материалы Поволжского края》などの大作を発表し、かたわら70年代には新聞雑誌に地方便り、旅行記、歴史もの、文芸批評、郷土誌、児童読物など執筆するほか、専門の文学上の論文や翻訳を発表するなど多面的な活躍をした。そして1876年には有名な『ロシア民族のなぞ』、すなわち本稿でその一部を紹介したなぞの蒐集書、が出た。サドヴニコフは民間伝承に対する関心をつぎのように説明している。「わが民族の文化と精神面の発展を知りたいという希望は、わたしをしてまず第一に 民族の創造物の言語作品に着手せしめた」。民間伝承はロシア民族の世界観、事物に対する見方、ロシア史上のもっとも重要な諸事件に対する民族の反応を知る上でサドヴニコフにとってはもっとも重要な資料であったのである。このように民間伝承に強い関心をいただいていた彼はその後も農民の蜂起反乱時代の伝説、説話や物語を集めて出版したが、これが当局の忌にふれ、以後いろいろな面で生活が圧迫され、不幸な晩年を1883年の12月に閉じた。しかし『ロシア民族のなぞ』は発表以来好評を博し、ツルゲーネフもこれを高く評価したし、今日では貴重な文学的記念碑としてダーリの『ロシア民族の諺』、アフナシエフの『民話集』と並び称せられている。なお、有名なロシア民謡の「ステнка・ラージンの歌」はサドヴニコフの作詞であるという。

（以上略伝は В. П. Аникин の解説にもとづく。）

# 1 （斧）

（Топор）

農夫が森へゆくときは

Мужик пошел в лес,

道すがら家を眺め

В лес идет - домой глядит;

帰る道には森を眺める

Из лесу идет - в лес глядит.

このなぞの解は斧である。編者サドヴニコフが最初の大項目「住居」の第一番目に「斧」をかかげたのは斧が農民の生活にとってきわめて重要であったことをもの語る。斧はそれによって家（イズバ）をつくり（《斧をもたでは家（イズバ）はつくれぬ》という諺もある）、薪を伐り、用度品をつくったりするほかに、外敵に対する主要な武器でもあった。ロシア農民と斧とは切ってもきれない関係にある。このような斧を農夫が森へ木をきりに行くときは、それを腰帯のうしろに挿して行ったのである。このなぞの「眺める」はこの斧の状態を言ったものである。「家を眺め」、「森を眺める」と訳した「眺める」には「恋しく思う」の意が含まれている。

(Топор)

Мужик идет из лесу,

## Зеркало за поясом.

これも斧のなぞである。「鏡」とはピカピカに磨かれた斧である。これは木を伐って森から出てくる農夫の姿を描いたものである。「腰にさげて」については前掲1.（斧）の解説に説明した。

(Бревно и мох)

Что гость, то постеля.

これは地上に横わっている丸太とそれについた苔のなぞである。原註によるとロシアのなぞでは丸太は多く「横になっている」ものとして把握され、そこから「布団」、「枕」と連想がわき、つぎに丸太自身が「お客」というふうに連想が発展したものであろうという。ここでは「ふとん」は丸太についた苔である。

(Сучок)

# Полна хата

Воробей нагната.

イズバ（または南西ロシアではハータ）と呼ばれるロシア農民の家でもっとも一般的なものは、斧で伐りだした丸太を荒けずりのまま組立て、隙間に粘土やツンドラの草土をつめて風や寒さを防いだものである。なぞの「すずめ」とはこの丸太の節のことである。室内にいれば丸太の節がいっぱい見える、どころか丸太の節だらけといえる。原註によると《丸太壁にある木の節々を元気に跳ねまわっているすずめに見たてた技倆はおどろくべきものである。なぞでは不動の形象（ここでは木の節）も原則として運動の状態でとらえられている》とある。

(Мороз и ставень)

Трофим встал,

フィラトカは歯をくいしばっている А Филатка зубы сжал.

トロフィムは人名。日本で言えば「権兵組」とか「田吾作」とでもなろうか。ここでは凍寒（冬の早朝の一日でもいちばん寒い時）を言う。「フィラトカ」も人名、ここではよろい戸のこと。このなぞでは冬の寒い朝、空も白みかけたのでよろい戸を開けようとするが、それが凍りついていっこうに開かない状景を描いている。

## 6 （扉）

## （Дверь）

もみの木がさっと揺れると  
みんながふり向く

Елка смахнется,  
Все люди оглянутся.

## 7 （扉）

## （Дверь）

小熊がぶるっと身をふるわせると  
みんながふり向く

Медведица встряхнется —  
Все люди оглянутся.

原註によると以上ふたつのなぞの「もみの木がさっと揺れる」、「小熊がぶるっと身をふるわせる」とは扉がさっと開くさまを示すという。なぜ「もみの木」が扉を表わすかというとは扉はもみの木で造ることが普通であったのである。ここからもみの木→森→熊というふうに連想が發展してゆくのである。ロシアの森といえばわれわれにも熊が連想される。この二つのなぞは《誰かが扉をあけて入って来ると、並みいる人々がいっせいにその方をふり向いて見るさまを絵のように再現している》（原註）。

## 8 （扉）

## （Дверь）

腰のまがったじいさん  
みんなに手を貸す

Старик горбатый  
Всем руку подает.

これは扉の把手のなぞである。「腰のまがったじいさん」とはかすがい（錠）形の丸く曲げられた把手である。《しかもこういう把手は丈夫で長もちするから、これまたじいさんを連想させる》（原註）。

## 9 （ペチカ）

## （Печь）

隅にいる巨人

Великан в углу.

ペチカはいうまでもなくロシア式暖炉である。それは部屋の隅に構築される。ペチカは大きくて、どっしりしている。小さな農家にとってそれはまさに「巨人」で

ある。

10 (風と煙)

(Ветер и дым)

ぬすびと部屋にしのびこみ  
あるじ  
主人を窓からさらってゆく

Пришел вор  
Во двор,  
Хозяйна в окно унес.

風が吹きこんで来て部屋に立ちこめていた煙を吹きはらってゆくさま。「ぬすびと」は風,「主人」は煙。

11 (炭火)

(Загнетка)

金色のすずめが  
函いっぱいにつまっている

Полна коробочка  
Золотых воробушков.

これはペチカの中の炭火を集める場所(Загнетка)の炭火を描いたものである。原註によるとこれは炭火を「金色のすずめ」という奇想天外なたとえ方をして、その美しさを絵のように描きだした詩的ななぞのひとつであるという。

12 (ろうそく)

(Свеча)

身体は白く  
頭は金色  
しかし心は粗布

Тело бело,  
Душа портяная,  
Маковка золотая.

このなぞでは日本語に訳す場合、心(Душа)と芯が期せずして相通じるのが面白い。原註によるとこのなぞは肉体を汚れたものとし、心(精神)を清いものと教えて来たキリスト教会的な考え方を逆にしたものであって、こういう意識こそはロシア農民の特質であるという。ここでは「心」はろうそくの「芯」である、と同時に心(精神)を暗示している。「粗布」とはろうそくの芯が亜麻糸でできていたことをいう。

13 (ろうそく)

(Свеча)

シャツをふところに入れて  
はだかである

Сам голый,  
Рубаха в пазухе.

「シャツと」はろうそくの芯である。ロシア農民の常用したシャツ(ルバシカ)は亜麻布で造り、ろうそくの芯も同じ亜麻糸であった。そこから芯をシャツと見立

てたのである。

14 (枕)

(Подушка)

手も足もないのに  
シャツをくれと言う

Без рук,  
Без ног,  
Рубашки просит.

人は夜、寝床に入って泣くことがある。そんなとき農民はシャツ（ルバシカ）で涙をぬぐったのであった。ダーリのロシア語辞典にも《ルバシカで涙をぬぐう Рубашкой слезы утираем.》という文例がある。なお「手も足もないのに」という句はロシアの謎のかけ出しの常套句のひとつでもある。

15 (枕)

(Подушка)

ひとの涙を飲み  
だまっている

Слезу пьет,  
Сама молчит.

前の解説を参照のこと。ここでは涙が枕の上に落ちるのである。《短いうちに多くの意味をこめた詩情あふれた謎である》（原註）。

17 (壁の肖像画)

(Портрет на стене)

首すじから背のあたり  
まさしく彼だ  
服もそうだし  
海狸の帽子もたしかにそうだ

Есть клен,<sup>1)</sup>  
Есть он,  
Есть и платье на нем,  
Есть и шапка с бобром.

18 (壺)

(Горшок)

土堀り場、土ふみ場  
轆轤<sup>ろくろ</sup>場、火事場をとおり  
それから市場へ出され  
若いときは  
家族みんなを養ったのに  
年齢<sup>とし</sup>をとったら  
おむつをさせられ  
死ねば穴へ捨てられ

Был я на копанце,  
Был я на топанце,  
Был я на кружале,  
Был я на пожаре,  
Был я на базаре ;  
Молод был —  
Семью кормил,  
Стар стал —



見むきもされない  
犬も骨をしやぶらない

Пеленаться стал.  
Умер — мои кости негодящие  
Бросили в яму  
И собаки мои кости  
Не гложут.

壺に関するなぞは多いが、これはその代表的なもののひとつ。ここでは壺の一生ともいふべき姿が語られている。原料の粘土を掘り出し、それを足で踏みつぶし、<sup>ろくろ</sup>轆轤で廻して形をとり、かま（窯）で焼き（「火事場」）、出来上ったら市場へ売り出す。それから家庭内で長く使われ、古くなってひびが入ると白樺の表皮を貼って修繕され（「おむつをさせられ」）、やがてこわれれば穴に捨てられてしまう。古い時代のロシア農民——農奴はこの壺の運命のなかに自分の一生を見たのかもしれない。なぞのもつ哀調はこのことを思わせる。「若いときは」とは壺が作られてからひびの入らないまでの、丈夫でしっかりしている時期を指す。「家族みんなを養った」とは壺は食物や飲料の容器として農民の家庭ではなくてはならないものであったことを言っている。

## 19 （鉄びんと土なべ）

（Пивной котел и горшок）

「そこの黒いの

Черная гагара<sup>8)</sup>!

どこさ行く?

Куда ты идешь?

「だまれ

— Молчи, гагарыш,

お前も直きにゆくぞ」

И ты там будешь.

「黒いの」は鉄びんのこと。「お前も」と言われたのは土なべ。ここでは鉄びんに向って土なべが問いかけたのに対し、鉄びんがそれに答えた形となっている。両方ともいずれは火にかけられるのである。

## 20 （天びん棒）

（Коромысло）

夜も明けないうちに

Ни свет, ни заря

腰まげて家から出てゆく

Пошел согнувшись со двора.

朝早く水汲みにゆく時の天びん棒のなぞであろうか。「腰まげて」とは天びん棒の形（天びん棒は真直ぐではなく、両端がさがり中高である）だが、桶を両端にぶら下げて天びん棒をかついだ、すこし身をかがめた人の姿も想像される。

## 21 (サモワール)

(Самовар)

伊達男

Стоит ферт,

両手を腰にあてて立っている

Подбоченившись.

サモワールとは茶をいれる湯をわかすためのロシア独特の湯わかし器である。その形はなかなか洒落た形をしているし、銀色にピカピカと磨き上げられたサモワールは美しいものだ。「両手を腰にあてて」とはサモワールの両側に把手がついていることを示す。

## 22 (急須)

(Чайник)

腹は風呂

В брюхе — баня,

鼻は節<sup>ぶし</sup>

В носу — решето,

頭におへそがあり

На голове пупок,

手は一本で

Всего одна рука,

肩にある

И та — на спине.

急須を頭にえがけばこのなぞの言うところはいちいち思い当る。《身近かのありふれたものを題材としたすばらしいなぞのひとつである》(原註)。

## 23 (パン)

(Каравай)

かたまりがたくさんあり

Комовато,

鼻の穴がたくさんあり

Ноздревато,

唇がたくさんあり

И губато,

こぶがたくさんあり

И горбато,

ねり粉のままのところもあり

И т<sup>9)</sup>яскло,

酸っぱくもあり

И кисло,

酸っぱくないのもあり

И пресно,

美味しく

И вкусно,

美しく

И красно,

まるく

И кругло,

かるく

И легко,

やわらかく

И мягко,

またかたく

И твердо,

またもろく

И ломко,

黒くもあり	И черно,
白くもある	И бело,
そしてみんなに好かれる	И всем людям
	Мило.

ここにいうパンとは大型の丸パン（каравай）で、これを一片ずつ切りとって各自の食べ用とするのである。自分たちの生活と切ってもきれないパンをその形、味、性質などを縦横に論じた素晴らしいなぞで、まさに《パンに対する真の讃歌（原註）》である。「かたまりがたくさんあり」とは原註によると大型丸パンがいくつものパン切れに切られ得ることを言うのだらうという。なおまた原註によると、「ねり粉のままのところもあり」、「酸っぱくもあり」、「酸っぱくないのもあり」という箇所はパンのテスト（ねり粉）のことを言う、とある。

24 （ジェリー）	（Кисель）
おじいさんが笑えば	Дединька смеется,
外套がゆれる	На нем шубонька трясется.

ジェリーがもろく、ゆれやすく、くずれやすいさまを言ったもの。

25 （茶碗のミルク）	（Чашка молока）
小さな浅い湖	Маленькос озёрко,
だが底は見えない	А дна не видать.

29 （鶏の卵）	（Яйцо）
野菜畑に	Под дубком, дубком
毬でも石でもないものがある	Под карандышком <sup>10)</sup> —
	Ни клубком,
	Ни камешком.

にわとりはよく野菜畑に、とくにジャガイモ畑の畝間などに、卵を生む。これはその卵のことである。

27 （シャツ《ルバシカ》）	（Рубашка）
貧乏人は厚く	У бедного толсто,
金持ちは薄い	У богатого тонко,

いつも身につけているもの                      Всегда при себе.

「厚い」、「薄い」は布地の厚さをいう。「厚い」のは粗布であり、「薄い」のは良質の布である。

28 (服の前ヘリとボタン)                      (Кайма и пуговицы)

竿に                      Полон шестик

すずめがいっぱいとまっている              Воробышков.

服の前縁にボタンが縦にいっぱいついているさま。

29 (耳輪)                      (Серьга)

黒い森のかなたに                      За темными лесами

二羽の白鳥が舞う                      Две лебедей плясали.

「黒い森」とは婦人の黒髪のこと。「白鳥」とは耳輪を指す。娘が歩くと耳輪がゆれる。それを「白鳥が舞う」のに見たてたのである。原註も言うように《美しい、詩とも言いたいほどのなぞ》である。

30 (札入れ)                      (Бумажник)

<sup>おもて</sup>面表紙と<sup>うら</sup>裏表紙だけで              Книга — раздвига,

中身のない                      Два листа,

本                      Середка пуста.

31 (積んだ薪)                      (Поленница)

<sup>つの</sup>角だらけで                      Стоит сохатый,

しかも穴だらけだ                      Весь дыроватый.

これは良質の薪ではなく、雑木の薪を積んだものであろう。薪の一本一本には小枝や節などがたくさんあり（「角だらけ」）、しかもそれが真直ぐではなく曲っている、その積んだものは当然きちんと積み重ねられないので<sup>すきま</sup>間隙が多い。それが「穴だらけ」なのである。

32 (にんじん)                      (Морковь)

赤いきれいな娘が監獄にいる              Красна девица

お下げ髪を外へ出して                      Сидит в темнице,

Коса — на улице.

「お下げ髪」とはもちろんにんじんの葉である。また「監獄」の代りに「地下室」という variant もある。

33 (えぞいちご)

(Малина)

赤い臼に

Красная ступка,

白いきね

Белый толкач.

原註によるとこれは《短いコトバでえぞいちごの色と形をとらえたすばらしい農民のなぞのひとつ》であるという。日本のなぞにも「山のなかに赤い<sup>きやはん</sup>脚絆はいてるものナーニ」(解は「うど」または「ミズ」)<sup>11)</sup> というのがある。

34 (けしの花)

(Маков цвет)

塵をまけばあーら不思議

Кину порохом —

町があらわれた

Станет городом :

赤いモスクワ

Красной Москвой,

白いリトワニヤ

Белой Литвой.

「塵」とはけしの種子のこと。日本でも「けし粒ほど」と言うように非常に小さい。「赤いモスクワ」は赤いけしの花のむれ、「白いリトワニヤ」は白い花のむれを表す。赤や白のけしの花が咲きみだれているさまを描いたもの。「リトワニヤ」は現在はバルト海にのぞむソ連邦の一共和国であるが、18世紀まではリトワニヤ公国として栄えた国であった。「赤いモスクワ」—古いモスクワ市にはけしの玉のような形のドームを頂く寺院が立ち並んでいたという。

35 (ばれいしょ)

(Картофель)

のん気なめんどり

Курочка — пустодом

家敷のそとへ巣をつくり

Свила гнездо за двором,

巣に入りながら

Сама — в гнезде,

卵はそとへ出す

Яички — наружи.

じゃがいもが畑の畝間に顔を出しているさま。ルナアルは『博物誌』で(ばれいしょ)をつぎの短文で表している：《わしゃ、子供が生れたようだ<sup>12)</sup>》。

36 (ホップ)

(Хмель)

家のうしろに権兵衛どんが	На задворочке
ちぢれ髪をふるわしている	Кудерочками
	Захарушка трясет.

「権兵衛どん」と訳した原文は「ザハルシカ」(人名)である。《ホップが房を動しながら風にゆれているさまを描いた素晴らしいなぞである》(原註)。

37 (いらくさ)	(Крапива)
家のうしろの倉庫のかげで	За дворами
娘が男をひっぱたいている	За клетями
	Парня девка ерепенит. <sup>13)</sup>

いらくさには茎、葉柄、葉面に刺毛があり、これに触れるとはげしい痛みを感じる。それは「ひっぱたかれた」ように痛い。同じいらくさのなぞで《火でもないのに、焼けつく》というのがあるが、その痛さはまた焼けつくようにもはげしいのである。

38 (豚の親子)	(Свинья с поросятами)
小さいものの群れ	Рой <sup>14)</sup> гору повалил.
山を倒した	

「小さいものの群れ」とは生れて間もなう豚の仔の群れ、「山」は親豚。親豚のまわりに仔豚が乳をのみに群っているさま。

39 (豚の親子)	(Свинья с поросятами)
諸候飲み	Бочка стонет,
樽うなる	Бояре пьют.

「諸候」は仔豚の群れ、「樽」は親豚。前のなぞと同じ状景。

40 (豚の鼻)	(Свиной пятак)
けっして磨りへらない	Что на свете не тупится?

41 (めんよう)	(Овца)
野こえ山こえ	По горам, по горам
歩いてゆくのは	Ходит шуба да кафтан.

シューバとカフタンばかり

「シューバ」は毛皮の外套,「カフタン」はらしや布で作った農民用の裾の長い, ちょっと外套のような感じのする服。

#### 42 (めんどり)

(Курица)

奥方さま77枚の着物をきて

У барыни семьдесят семь платьев;

街へ出たが

Вышла на улицу, —

風が吹いたら

Ветер подул,

脊中まる出し

И спина — гола.<sup>15)</sup>

《困った状態におちいって狼狽している貴夫人を思わせる辛辣で、陽気ななぞ》と原註にもあるように微苦笑をさそうなぞである。「77枚(700枚という variant もある)の着物」とはにわたりの羽毛を指す。

#### 43 (おんどり)

(Петух)

70枚の葉のなかから

Из семидесяти листов

はっきりと声がひびく

Подается ясный голосок

繁った森までも

В темный лесок

天守閣の上までも

И в высокий теремок.

「70枚」の葉については(めんどり)のなぞの解説参照のこと。《なぞが<sup>ボエジー</sup>詩であることを証明するようななぞである》(原註)。なお「繁った森」と訳したのは「暗い森」と訳してもよい、そのほうが夜明けの、まだ暗い森を想像させるかもしれない、

#### 44 (がちょう)

(Гусь)

白いお家<sup>うち</sup>に

Белы хоромы —

赤い土台

Красны подпорки.

《白い色と赤い色とをはっきりと対照させて》(原註) 鵞鳥の姿をあざやかにとらえている。

#### 45 (水溜りと鴨)

(Утки в луже)

異人さんたちが玄関口へ来て

Пришли немцы

肌を洗う

Под наши сенцы,

Кожу полощут.

「異人さん」と訳した原文はドイツ人（немец）である。元来は немец（ニエーメッツ）とは《ロシア語を話すことができない者》という意味であった。農民にとってドイツ人は外国人の異名でもあった。農民はドイツ人のしゃべるコトバがわからない、それと鴨のガアガアいう鳴き声を比較したのである。なお 93（雁がとぶ）、65（つばめ）のなぞを参照のこと。

## 46 （荷馬車、櫓、馬）

（Телега, сани, лошадь）

3人の作男が口口<sup>くちぐち</sup>に言う：

Сошлись три батрака и говорят：

「おれは夏がつらい」

Один：「Мне летом тяжело！」

「おれは冬がつらい」

Другой：「Мне зимой тяжело！」

「おれはいつもつらい」

А третий：「Мне всегда тяжело！」

ロシアのなぞには会話体が用いられることがよくある。〔19（鉄びんと土なべ）、63（畑の柵）参照。〕「夏がつらい」のは荷馬車で、「冬がつらい」のは櫓である。しかし馬は夏は荷馬車に、冬は櫓につけられて働らかされるので「いつもつらい」。

## 47 （車輪）

（Колесо）

丸くなって転っているうちに

В кружечках катится,

ふとなにかないのに気がつく

Чего-нибудь хватился.

「ふとなにかないのに気がつく」とは原註によると、古い車輪などではいつの間にかたが（鉄輪）とか輻（スポーク）などがなくなっていることがよくあるものだが、そのことをいう、とある。

## 48 （くび木と鈴）

（Дуга и колокольчик）

ねていれば黙っている

Лежу — все молчу,

立てば相手を言い負かす

Подыми — всех заговорю.

鈴のついているくび木（馬の首につけて車を走らせる道具）のなぞ。「立てば…」は鈴のついたくび木を馬につけ、櫓または馬車を走らせると、鈴がリンリンと音たかく鳴り出し、あたり一面にひびきわたることを言う。「ねていれば」はくび木が馬につけられないで、床または地上に横たえられているとき。

## 49 （櫓と馬）

（Сани и лошадь）

這うやつは這い

Поползушки ползут,



走るやつは走る

Побегушки бегут.

50 (くつわ)

(Удила)

肉のなべのなかに

В мясном горшке

鉄がたぎっている

Железо кипит.

原註によるとこれは長い道のりを走って泡をふいている馬の、その口（「肉のなべ」）の中のくつわを芸術的に表現したなぞであるという。

51 (馬とくつわ)

(Лошадь и удила)

小魚くわえて鳥がとぶ

Летит птичка,

呑みこみもできず

Во рту плотичка,

吐きだしもできず

Ее ни проглотить,

Ни выхаркать.<sup>10)</sup>

これも馬とくつわのなぞ。「鳥」は馬を表す。《ピカピカと銀色に光るくつわを魚の鮮かに光る色にたとえたのである》(原註)。

52 (製粉所)

(Мельница)

野原で

В поле, поле

馬が歩きだした

Затопали кони,

縁日で

Заревел медведь

熊が吼えだした

На ярмарке.

原註によると「野原」は製粉機械の伝導装置をいい、「馬が歩きだす」とは鉄のきねが動きだすこと、「熊が吼え出す」とは粉をひく臼がまわり出すこと（その時ごうごうと大きな音をたてる）を言うところである。なお縁日（ヤールマルカ、定期市）で熊を見ることはロシア農民の娯楽のひとつであったという。このなぞは機械のひとつ部分が始動すると、それにつれてつぎつぎに他の部分が動き、やがて機械全体が廻転するさまを描いたものである。

53 (墓場)

(Мазарки)

この村には人はかなりいるのだが

Село населено ;

雄鶏はときをつくらず

Петухи не поют,

人も眼をさましはしない

И люди не встают.

墓場の静けさを表わしたなぞ。《生きている人たちの村》では早朝おんどりがときをつくり、それにつれて村人が起きだして仕事にかかり、活気があふれ、賑やかになって来るのに、ここではその反対の状況である。

## 54 (寒村)

煙突 1 本  
家 4 軒  
通り 8 つ

## (Деревнюшка)

Одна труба,  
четыре избы,  
восемь улиц.

## 55 (かま)

新月  
昼は野にかがやき  
夜は天へのぼる

## (Серп)

Месяц  
Новец  
Днем на поле блестел,  
К ночи на небо слетел.

よく磨かれた鎌を新月にたとえたもの。昼には農作業で畑で光っていた鎌が、夜には大空へ昇って新月となったという美しいなぞ。編者サドヴニコフ自身もこれを《もっとも詩的ななぞのひとつ》と言っている。

## 56 (穀草の束の集り)

ダツタン人との国境の野に  
みんなが打ち殺され  
ひげを削られ  
腹を割<sup>さか</sup>れてころがっていた

## (Сноп)

На поле Арском,  
На порубеже татарском  
Лежат все побиты,  
Бороды побриты,  
А брюха распороты.

原註によるとこれは打穀した後の穀草の束を打穀場いちめんひろげ、ならべておく光景を描いたなぞであるという。「ダツタン人」(タタール)はかつてのロシアの東方の隣国人であり、最大の宿敵であって、つねにその侵入の防禦に苦慮していた。いわゆる《蒙古の侵入》の蒙古人とはこのダツタン人を指す。なおロシアでは打穀は古くから戦闘になどえられていたということで、それなら戦闘の相手としてダツタン人を想定することはきわめて自然である。

## 57 (穀草の束)

## (Сноп)

小さな田吾作

## Маленький Фанасик

草の帯しめている

Лычком подпоясан.

「草の帯」とは穀草を束ねるワラのこと。

## 58 (穀草の束と乾燥場)

(Снопцы и овин)

村人みんなは帯しめているのに

Весь мир подпоясан,

村長ひとり前をはだけている

Один староста распоясан.

「村人みんな」は穀草の束の集積、「帯しめている」については前掲のなぞの解説参照のこと。「村長」は穀草乾燥場（建物）。「前をはだけている」とはその建物の戸が開けたままになっていること。

59 (らい麦)

(Рожь)

ダツタン人との国境の野に

На поле Ногайском

とがった柱がならんでいる

На поле татарском

杵の頭は金色だ

Стоят столбы точеные,

Головки золоченые

「ダッタン人との国境の野」については 56（穀草の束の集り）のなぞの解説参照のこと。「とがった柱」とはらい麦の実った草丈、これはまたモーコ・タタール人の侵入を防ぐために国境に設けられた防塞用の杭を想像させる。原註も《このなぞは叙事詩精神にあふれている》と言っている。「柱の頭は金色だ」はらい麦の実った穂先きが黄金色であることを示す。

## 60 (らい麦)

(Рожь)

星の数だけ

Сколько на небе звездочек,

空には穴がある

Столько на небе дырочек.

奇異に感じられるが、これらもい麦のなぞである。原註によると「空」は高いところ、すなわち、穂（穂は草丈の最先端に出る）という意であり、「星」とは穀粒のことであろうという。穀粒（「星」）の数だけ穂（「空」）には穴がある、というのである。

## 61 (えんどう豆)

(Горюх)

丸い青い小さいやつ

## Малы малышки

地にもぐり込んで  
垣根に這い出し  
青色のお母さん見つけた  
桜色のお母さん見つけた

Катали катышки,<sup>17)</sup>  
Сквозь землю прошли,  
По тычине вползли,  
Синю матку нашли,  
Синя, синя, да и вишневая!

「丸い青い小さいやつ」とはえんどう豆（種子）のこと。このなぞはえんどうの花が青い色、桜色に咲きみだれているさまを美しく描いたものである。

## 62 （きび）

(Просо)

小さな黄金の酒びん

Малая мальшка,  
Золота кубышка.

この酒びんとは胴が太くて首の細いびんのことである。黄金色に熟したきびの実のなぞ。

## 63 （畑の柵）

(Изгородь в поле)

曲りくねったやつが  
森の方へ走っている  
みどりのちぢれ毛のやつが  
それにたずねる：  
「おい、曲ったやつ、  
どこへ走るんだ」  
「みどりのちぢれ毛よ、  
お前の番をしているのさ」

Криво-лукаво  
К лесу бежало ;  
Зелено-кудряво  
Спрашивало :  
«Криво-лукаво !  
Куда побежало ?»  
«Зелено-кудряво,  
Тебя стеречи.»

「曲りくねったやつ」とは畑をめぐる柵が真直ぐではなく、あちらこちらに曲りながら森までつづいているさまを示す。「森の方へ走る」とは原註によると、柵のそばを馬で通ったり、徒歩で行ったりする場合、柵自身がわれわれの眼には走っているように錯覚されることを言うのであるという。「みどりのちぢれ毛のやつ」とは草か、あるいは作物（の葉）のことであろう。このなぞも問答体である。「お前の番をしている」とは畑に他人や家畜が入らないように柵がしてあることをいうのである。このなぞは《ロシアのなぞのもっとも美しいもののひとつ》と原註は言うが、同感である。ルナアルの『博物誌』の発想法を思わせる。

## 64 (道)

ロシアのはしからはしまで  
1本丸太がころがっている  
もし手と足があって  
起き上るなら  
天までとどこうし  
眼と口があるなら  
いっさい残らず話すだろう

## (Дорога)

Лежит брус  
Во всю Русь ;  
Если бы руки да ноги,  
То бы встал  
Да и до неба достал ,  
А если бы рот да глаза,  
То все рассказал.

原註にもあるように《雄大ななぞ》である。そしてこのなぞはたんに《雄大》であるだけでなく、《その中には深い詩的な思考がある——もし啞の証人、たとえば部屋の壁、ここでは道、がその見たことを話すとしたら……とはなにびとの頭にも一度や二度は浮ぶ想念である》(原註)。

## 65 (道)

天地創造のとき  
樫の木が地に倒れ  
そのまま今に横わる

## (Дорога)

Когда свет зародился,  
Тогда дуб повалился,  
И теперь лежит.

「樫の木」はロシアの象徴的樹木。道はこの世とともに古い。フランス語にも《道のように古い vieux comme rue》という言い方がある。

## 66 (車の跡)

道が雨樋だらけだ

## (Колеи)

Вся дорога в лотках.<sup>18)</sup>

車のわだちの跡が道路上に凹んで長々とつづいているさまを雨樋にたとえたもの。多分、田舎の悪い道であろう。昔しのロシアの田舎道はその悪いことで、通る人を苦しめたものだった。

## 67 (昔しの汽車)

なんちゅう馬だ！  
なんちゅう犬だ！  
乾草<sup>くさ</sup>ではなくて  
薪を食べてるぞ

(Чугунка)<sup>19)</sup>

Что за лошадь !  
Что за пис !  
Он ни сино —  
Дрова ист.

## 68 (昔しの汽車)

(Чугунка)

えれえこった！

До чего народ доходит.

サモワールが

Самовар в упряже ходит！

<sup>くつわ</sup>  
轡をつけられて走っている！

以上ふたつはかつての薪で走った機関車のなぞである。はじめて見た汽車に農民がびっくりし、また感心しているのである。

## 69 (機械)

(Машина)

こつちを見ても不思議だ

С одного конца хитро,

あっちを見てもなお不思議だ

С другого мудреней того,

真中を見れば頭がこんがらかるわ

А в середке ум за разум заходит.

農民が機械を見て首をかしげているさま。

## 70 (白樺)

(Береза)

大きいのも小さいのも

Хоть малая, хоть большая —

立っていればざわめく

Где стоит, там и шумит.

白樺だけではなく、とにかく木というものはあるかなきかの風にもいつも葉をそよがせているものだ。

## 71 (白樺の木立)

(Березы)

青い帽子をかぶって

На поле на Ногайском

白い柱が野にならんでいる

Стоят столбики белёны,

На них шапочки зелёны.

《対象を適確にとらえたなぞ。どこか子供の描いた絵を思わせる》と原註にある。なお「青い帽子をかぶって」というなぞのかけ出しはロシアのなぞでは常套的なものである。原文第1行の На поле на Ногайском (Арском, Гагайском という場合もある) という句も「野」をいう場合の常套句。

## 72 (ななかまど)

(Рябина)

森の灌木のしげみに

В лесу на кусту

牛肉がぶらさがっている

Говядинка висит.

牛肉は赤い色をしている。ななかまどの実も赤い。その実の集った房はなるほど

牛肉のようだ。

73 (木の芯)  
背丈は木と同じなのに  
姿は見えぬ

(Сердцевина)  
С деревом равно,  
А не видно его.

74 (雪の中の木の株)  
夏はむすめさん  
冬は若嫁さん

(Пень в снегу)  
Летом — девица,  
Зимой — молодница.

冬になると木の切株には雪がつもる。それを白い頭布（プラトーク）をかぶる農家の若い嫁さんにたとえたのである。夏には雪が、つまり、白い冠りものがない、それを白いプラトークなどかぶらない「むすめさん」と見た。それと「むすめ」から「若嫁」になるという時間の推移を夏から冬への季節の移り変りにかけて言ったのであろう。

75 (猟銃)  
痩せたマルチン  
遠くまで唾とばす

(Ружье)  
Сухой Мартын  
Далеко плюет.

「マルチン」はなぞによくでてくる人名。ここではもちろん猟銃のこと。「唾」は銃弾。

76 (銃弾)  
小さい小鳥  
誰はばかりず  
野をはしる

(Пуля)  
Птичка —  
Невеличка,  
По полю катится,  
Никого не боится.

77 (銃弾)  
やまどりが飛んでゆき  
あかざの草むらに降りたが  
いまだに見つからぬ

(Пуля)  
Летела тетеря  
Вечером — не теперя,  
Упала в лебеду  
И теперь не найду.

以上ふたつのなぞの「小さな小鳥」と「やまどり」は銃弾のこと。

## 78 (水)

(Вода)

いつもしゃべっている

Что без умолку?

小川のせせらぎのことであろう。

## 79 (川)

(Река)

山あいを

Между гор бежит конь вороной.

黒馬が走る

《川の水はふつうは暗色であるので「黒馬」といい、急流では白く泡立つので「白馬」という場合もある。川の流れを馬にたとえるのには理由がある、というのは川はそれに乗って（浮んで、船などで）移動することができるからである、ちょうど馬に乗ってゆくように》（原註）。

## 80 (川)

(Река)

橈は走る

Санки бежат,

ながえは残る

А оглобли стоят.

「橈」は川の流れを、「ながえ」（＝車、橈のかじ棒）は川の岸を意味する。本来は橈とながえはつきもので（馬橈の場合）、一心同体なのである、川と岸のように。

## 81 (冬の川)

(Река зимой)

あちらこちらに

Сям пересям —

新しい屋根ができ

Крыша нова,

白いペンキがぬってある

Пересыпка <sup>20)</sup>бела.

「白いペンキの新しい屋根」とは川のところどころが凍り、その上に雪がかぶさっているさま。

## 82 (川と岸の草と)

(Река, берег, трава)

3人がそれぞれ言う：

Один говорит：

「走ろう」

«Побежим!»

「ここにしよう」

Другой говорит：«Полежим!»

「お祈りしよう」

А третий говорит：«Помолимся!»



「走ろう」は川,「ここにいよう」は岸,「お祈りしよう」は草のそれぞれの言い分。「お祈りしよう」とは川岸の草が風になびくこと。

## 83 (小川)

## (Ручей)

なんだか言いながら  
畑のそばを曲ってゆく

Чи<sup>21)</sup>радно — выратно  
По огороду гнетется.

「なんだか言いながら」とは小川のせせらぎの形容。畑が曲ればそれに沿って、そばを流れる小川も曲ってゆく。

## 84 (氷がとけてながれてゆく)

## (Ледоплав)

権兵衛が旅立てば  
お花どんが泣く  
「泣くな、お花どん  
秋には来るよ

Василий поезжает,  
Василиста плачет,  
«Не плачь, Василиста,  
Я осенью приеду —

けつしてお前を忘れはしねえだ」 Тебя не забуду !»

「旅立つ」は春の雪どけで川の氷が流れ去ってゆくこと。「秋には来る」は秋が来て寒くなるにつれて川に氷が張ってくる。ロシアの秋は冬の戸口である。

## 85 (水の反映)

## (Отражение в воде)

わしらの前では  
足が上  
おまえの前では  
頭が上

Перед нами —  
Вверх ногами,  
Перед тобой —  
Вверх головой.

## 86 (葦)

## (Камыш)

老人が水の上に  
あごひげをふっている

Сидит старик над водой,  
Сам трясет бородой.

## 87 (海上で船がかしぐ)

## (Морское судно покосит)

教会のてっぺんに登れば  
遠くの野に権兵衛が見える  
「権兵衛はなにしてるだね？」

Выстану я на церкву,  
На маковку,  
Увижу я Фильку

「乾草<sup>くき</sup>あ刈<sup>き</sup>っているだ」

На запольки.

— Что Филька делат?

— Сено косит.

「権兵衛（原文はフィリカ＝人名）」は海上の船，「乾草を刈っている」は船が波のためにかたむいているさま。

88 （熊）

（Медведь）

牛<sup>うし</sup>だが角<sup>つの</sup>がなく

Корова комола,

額<sup>ひら</sup>がひろく

Лоб широк,

眼<sup>め</sup>がほそく

Глаза узеньки;

群<sup>ぐ</sup>れで飼<sup>か</sup>いもできず

В стаде не пасется,

手<sup>て</sup>に負<sup>お</sup>えないもの

И в руки не дается.

《熊の原初<sup>はつし</sup>的形象<sup>けいさう</sup>を示<sup>し</sup>したなぞ》（原註）。

89 （うさぎ）

（Заяц）

焼肉<sup>やきにく</sup>が毛皮<sup>け</sup>着<sup>き</sup>て

По лесу жаркое в шубе бежит.

森<sup>もり</sup>を走<sup>はし</sup>ってゆく

90 （うさぎ）

（Заяц）

火<sup>ひ</sup>のように道<sup>みち</sup>を横切<sup>よこ</sup>ったぞ

Чертогон, чертогон,

十字<sup>じゅうじ</sup>を切<sup>き</sup>れ, 十字<sup>じゅうじ</sup>を切<sup>き</sup>れ

Он и бегат как огонь.

「火のように道を横切った……」とは、兎が道を横切ると不吉の前兆であると信じられていたことをいう。そんなときは「お前には木株と丸太（お前は木株か丸太にぶつつかって死んでしまえ）、われらには道を」ととなえて悪鬼をはらったという。「十字を切る」とは言うまでもなく、キリストにお祈りをささげること。以上は原註による。なお「十字切る」は「くわばら、くわばら」と訳してもよからう。

91 （うさぎ狩り）

（Охота за зайцем）

1 円<sup>えん</sup>が逃<sup>に</sup>げ

Рубль бежит,

100円<sup>えん</sup>が追<sup>お</sup>つかける

Сто догоняют,

500円<sup>えん</sup>がつまずけ<sup>ば</sup>

А как пятьсот споткнется —

1000万円<sup>えん</sup>がお陀<sup>だ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>

Так неоцененный убьется.

ここで「円」と訳したのは原文では「ルーブル」(ロシア・ソビエトの貨幣単位)である。昔しのロシアのルーブルの貨幣価値は高く、ちょうどわが国の明治・大正時代の「円」に匹敵するものと考えてよいだろう。このなぞはたくさんの犬で兎を追い出してする兎狩りのなぞである。「1円」とは兎,「100円」とは猟犬たち,「500円」とは兎狩りをする人の乗る馬,「1000万円」(原文では《値段のつけられないほどの高価なもの》の意)とは狩をする人,ここではこういう大規模な兎狩りをするのできた金持ち階級の人,すなわち,地主,貴族を指す。苦しい生活を送っていた農民の目からすればお大名の兎狩りなどおこの沙汰であったのであろう。《皮肉な》なぞである。

## 92 (血)

## (Кровь)

紅い小粒の玉が  
庭をころがって行き  
塵につぶされた

Красный клубочек  
По двору катился,  
Пылью подавился.

原註によると、これはにわとりか家畜の首を切ったことのある人の体験から生れたなぞであろうという。

## 93 (雁がとぶ)

## (Гуси летят)

曲った糸巻棒  
天まで飛んでゆく  
且那のことばをしゃべりながら

Вилогато мотовило,  
Зато по-пански говорило,  
Под небеса уходило.

「糸巻棒」とはひょろ長い、不格好な人間を表わす(原註による)。ここでは雁のこと。なお雁ばかりではなく、鶴や白鳥もこの「糸巻棒」にたとえられることがある。「且那のことば」(また「タタール語」,「ドイツ語」という variant もある)とは《わからないことば》という意味。当時のロシアの貴族、地主たちは自分たちの間ではよくフランス語で会話することがあったので、ロシア語しか知らない農民は主人であるこの人たち(「且那」)の話すことがわからないことがよくあったのである。ここでは鳴きゆく雁の声をなんと形容してよいかわからないので、《何事かわれわれにはわからない言葉で鳴き交しながら》と言ったのである。なお 45(水溜りと鴨), 95(つばめ)のなぞを参照のこと。

## 94 (しぎ)

## (Кулик)

沼の中で泣いているくせに                      В болоте плачет,  
沼から出ようもしない                      А из болота нейдет.

《しぎの姿をそのままに伝えたすばらしいなぞである。事実、しぎの鳴き声は心にしみいるほどにもの悲しい》と原註は言う。泣いているのなら、泣かなくてもよいように沼から出たらよさそうなのに、という意が含まれている。なお「住めば都」という諺をロシアでは「どのしぎも自分の沼を讃める<sup>22)</sup>」という。

## 95 (つばめ)

(Ласточка)

ピーチク, パーチク

Шитовило<sup>23)</sup>

異人さんのことば

Битовило

前は小さな<sup>きり</sup>錐

По немецки говорило ;

後はフォーク

Спереди — шильце,

上は青いらしゃ服

Сзади — вильце,

下は白タオル

Сверху синенько суконьце,

С исподу бело полотенце.

「ピーチク, パーチク異人さんのことば」はつばめの鳴き声。以下の文句はその姿を描く。「異人さんのことば」については 45 (水溜りと鴨) のなぞの解説参照のこと。

## 96 (かごの鳥)

(Птица в клетке)

罪もないのに

Не грешна, а повешена.

吊されている

「吊されている」とは鳥かごが吊されているのを絞首刑で吊される<sup>り</sup>にかけたもの。なおドイツにもこれに似たなぞがあるという。

## 97 (とりの巢)

(Гнездо)

小さいが暖かく

Маленько,

居場所もたくさんある

Тепленько,

А места много.

## 98 (へび)

(Змея)

森の中に

Среди леса

鉄の棒切れ

Лежит кусок железа.

ルナアルは（へび）を《長すぎる》という一句で描写している。またこのロシアの（へび）のなぞに似た発想法は日本の民間伝承なぞにも見られる。たとえば、《海の中に草履一枚（解はかれい）》<sup>24)</sup>などがこれである。<sup>25)</sup>

## 99 （かえる）

(Лягушка)

かわいい乳ぶさが

Сидит титюшечка,

坐っている

Ни зверь, ни птушечка.

鳥でもけものでもない

短句よく蛙の姿をとらえている。なお『博物誌』では蛙を《彼女らは、煮立ったフライ油のねっとりした零のように草のなかから跳ね上る》<sup>26)</sup>とある。日本の俳句では「手をついて歌申しあぐる蛙かな」（宗鑑）がある。

## 100 （漁師）

(Рыбак)

道でないところを乗ってゆき

Ехал не путем,

叩くのも鞭や棒ではなく

Стегал не кнутом,

捕るのも鳥ではなく

Шибал не палкой,

むしるのも羽根ではなく

Ловил не галку,

食べるのも肉ではない

Щипал не перья,

Ел не мясо.

原註によると、これは夜間、舟のへさきへ松明をつけ、その光に集って来る魚をやすで突いて漁をする光景を描いたなぞという。最初の1行は舟の進むさまを示す。「叩くのも……」とは舟が櫂であやつられることをいう（馬なら鞭や棒で叩いて走らせるのだが）。「肉ではない」とは西欧諸国では魚肉はいわゆる「肉」のなかには含まれないことを示す。

## 101 （蚊）

(Комар)

6本足に

Об шести ногах,

4つの羽根

Об четырех крылах,

鼻は象ばな

Нос слоновий,

頭は熊

Голова медвежья.

《蚊はこのなぞでは巨大な動物に描かれている。このような誇張の比喩の仕方は、

蚊がほとんど眼にもとまらないくらいに小さなものなので、なお効果的である》(原註)。

## 102 (あり塚)

(Муравейник)

畑のそばの林の中に  
焼石もいれないのに  
湯がたぎっている

На поле на раменье  
Кипит вода без камня.

「湯がたぎっている」とは蟻が群って《熱くなって》(熱心に)動きまわっているさま。蟻塚の内部は実際に暖いという。以上は原註による。

## 103 (あり塚)

(Муравейник)

根元にはひしめき合っているのに  
木は悠然とそびえている

Стоит дерево под вершину браво,  
Под корень сила бьется.

「ひしめき合っている」のはもちろん蟻の群れである。

## 104 (あぶら虫)

(Таракан)

寒がり屋のおじいさん  
ペチカに穴をつくった

Дедушка ежок  
На печи дыру прожог.

あぶら虫はペチカの暖かい場所を好み、その隙間などに群れをなして巣をつくる、そのことを言ったのである。なお『博物誌』の(あふらむし)の項には《鍵穴のように、黒く、<sup>27)</sup>ペしゃんこだ》とある。

## 105 (のみ)

(Блоха)

黒くて小さなやつ  
着物の中に飛びこんで  
王様の眼をさます

Черненька,  
Маленька,  
В платье вскочила,  
Царя разбудила.

## 106 (のみ)

(Блоха)

鷹の眼をして  
山羊のようにはねる

На таком-то месяце  
На елховой <sup>28)</sup>пятнице,  
Родился зверь с глазами сокольными,

С попрыгом козлиным.

『博物誌』では（のみ）は《ばね仕掛けの煙草の粉<sup>29)</sup>》とある。たばこの粉は茶褐色だが《ロシアのなぞではのみは「黒い」ものと考えられている》（原註）のである（《喪服を着ている》と形容しているなぞもある）。

107 （くもの巣）

（Паутина）

じいさん居間を掃いている

Старик метет по горнице,

ほうきは<sup>はじ</sup>端に立っている

Метлы стоят по околице.

「じいさん」はくも、「掃いている」とは原註によると《探る<sup>さぐる</sup>》、あらゆる場所（隅々）を歩きまわる、という意味に使われている。「ほうき」はくもの巣、原文では「ほうき」は複数になっていて、数本のほうきということなのだが、訳文ではたんに「ほうき」とした。なお『博物誌』の（くも）は《髪<sup>30)</sup>の毛をつかんで硬直している、真黒な毛むくじゃらの小さい手》である。

108 （両眼）

（Глаза）

細い手綱

Тоненьки вожжишки

野原のはじまで伸ばしても

Во все поле тянутся

けつして切れない

И то не оборвутся.

109 （両眼）

（Глаза）

わたしの手綱は

Есть у меня вожжи :

天までとどくの

До неба достанут,

自分の身体をばは

А вокруг себя нет.

ひと廻りすることもできない

以上ふたつは両眼（というよりは《視線》というべきか）のなぞ。ここで「手綱」とは視線のこと。《人間の視線を馬を御する手綱になぞらえる芸術的根拠はきわめて複雑である。頭はこれを眼の向く方向へむけることができる、ということは視線が頭を自由に動かす、すなわち、視線は馬でいえばその手綱にあたるというのである》（原註）。

110 （両眼）

（Глаза）

ふたつの小さな星

Две звездочки маленьких

野原ぜんたいを

Все поле мне светят.

照らしてくれる

これも両眼のなぞ。《ひじょうに面白いなぞ。星明りでは夜も物が見える。物が見える眼はいわば星である。だからそれは「照らしてくれる」のである》(原註)。

111 (眉毛と両眼)

(Брови и глаза)

親<sup>てん</sup>貂の下に

Под мостом мостищем,

2匹の仔貂が遊んでいる

Под соболицем

Два соболька разыгрались.

「親貂」は両の眉毛を言う。《眉毛を黒貂にたとえることはロシア民謡ではよく用いられるところである》(原註)。ここでは眼(瞳)も貂(の仔)にたとえられている。なお原文の第1行目はなぞのかけ出しの常套句なのであえて訳さなかった。

112 (へそ)

(Пупок)

むすんで

Узловат Кузьма!

もつれて

Завязал узла —

どうしてもとけぬ

Развязать нельзя.

113 (空)

(Небо)

全世界をおおう

Синенька шубенка

青い外套

Покрыла весь мир.

114 (日の出)

(Восход солнца)

われ山の頂きのぼれば

Выстану на горку,

はるかかなたの畑に

На маковку,

百姓のミコルカが見ゆ

Увижу Миколку

На заповке.

「われ」とは日の出のときの太陽。太陽がのぼればあたり一面が明るくなる。もう早起きのお百姓さんが野良仕事をしているのが見える。

115 (月)

(Месяц)

あし毛の仔馬が

Сивый жеребец



垣根ごしにのぞいている

Через прясло глядит.

月の光りが垣根ごしにさしているさま。原註によると古代のロシアのなぞでは月  
は一般に馬にたとえられていたという。

116 (月)

(Месяц)

白い頭の牛が

Белоголова

門の下をのぞいている

Корова

В подворотню смотрит.

月はここでは「白い頭の牛」になっている。このなぞは閉じた門の扉の下端と地  
面との間の隙間から月光がさしこんでくるさまを描いたものである。

117 (月)

(Месяц)

沼のまんなかに

Посредь болота

金のひとかけら

Лежит кусок золота.

静かな水面に映っている金色の月。

118 (月)

(Месяц)

庭の上に

Над двором, двором

ミルクの入った茶碗が

Стоит чашка с молоком.

かかっている

ここでは月は「ミルクの入った茶碗」である。

119 (月)

(Месяц)

海のかなたに火が

За морем огонь

きれいに明るく燃えている

Добро, ясно горит.

《宇宙空間の物体を描いてもっとも詩的ななぞのひとつである》(原註)。

120 (空と星)

(Небо и звезды)

100の道に

Рассыпался горох,

えんどう豆がまきちらかされた

По сту дорог;

王も<sup>きさき</sup>后も美しい娘も白い魚も

Никто его не сберет:

誰も集めることはできない

Ни царь, ни царица,

Ни красна девица,  
Ни бела — рыбина.

夜空に散らばる無数の星屑が、ここではたくさんの道路上にまきちらかされた無数のえんどう豆にたとえられている。星空のこのような比喩のなぞはひじょうに多く、夜空が「草地」、「じゅうたん」、「むしろ」、「青いビロード」に、星屑がその上にまきちらかされた「壊れてバラバラの砂片になった寺院（コップ、船、宮殿など）」にたとえられているのもある。「王も后も……」というのは何人にも不可能なことを表わすときのなぞの常套句。またこの variant として《寺男も守銭奴も集めることができない》というのものもある。

- 121 (空と星) (Небо и звезды)  
無数の釘がうちこまれている Сито,  
Вито,  
Гвоздями убито.

「釘」とはここでは星を指す。釘の頭のにぶい光りを星の光りと見たのである。  
原文 Сито, Вито はなぞのかけ出しの常套句（韻を合せる場合の）。

- 122 (星) (Звезды)  
わがロシアで Что у нас чаще леса?  
森の木よりも多いもの

原文には「ロシア」という語はないが、文意を汲んで訳した。ロシアの広大な森林は無際限と言ってよいほどである。チェーホフの『シベリヤの旅』を見よ。<sup>31)</sup>

- 123 (流れ星) (Падающая звезда)  
天にもとどかず Не до неба,  
地にもとどかず Не до земли.

- 124 (空と星と月と) (Небо, звезды и месяц)  
この窓見れば Выгляну в окошко:  
籠いっばいのかぶら Стоит репы лукошко;  
あの窓見れば Выгляну в другое:  
弓形の鞭 Стоит плетъ с дугою.

「籠いっぱいのかぶら」は星空,「弓形の鞭」は月(三日月)。

125 (空, 星, 雲にかくれた月) (Небо, звезды, месяц за облаками)

はてしないロマノフの野に	Велико поле Романово,
たくさんの羊	Много скота рогатого ;
牧童ひとり	Пас пастух,
柳のしげみにかくれた	Спрятался за ракитов куст.

「はてしないロマノフの野」は夜空を,「羊」は星を,「牧童」は月を表わす。「柳のしげみにかくれた」とは月が雲にかくれたこと。「ロマノフの野」とはロシアの遼しなない野原をいうのだろうと原註はいう(周知のように帝制時代のロシアの皇室はロマノフ家であった)。また《ロシア皇帝》に関するなぞで《牧童(つまり、皇帝)は羊の群れ(つまり、ロシア国民)を飼っているのだが、めったにそれを(すなわち、羊の群れ=ロシア国民を)見ない》というがあるので、ここの「牧童」と「羊」にもこのような意味が含まれているのであろう。

126 (かげ) (Тень)

おまえにもあり	У тебя есть,
わたしにもある	У меня есть,
樫の木のは野にあり	У дуба — в поле,
魚のは海にある	У рыбы в море.

127 (世界) (Мир)

昔し昔しに建てられて	Какое строение давно построено,
こわれもせず	Не разваливается и не
修繕もいらないもの	требуется починки ?

128 (風) (Ветер)

手も足もないのに	Без рук, без ног
窓をたたき	Под окном стучит,
家に入れてくれと言う	В избу просится.

《せん細で深いポエジーにみちたなぞ》(原註)。

## 129 (雨)

(Дождь)

細くてのっぽで  
<sup>すね</sup>脛が長いのに  
 草を見ても姿がない

Тонок,  
 Долог,  
 Голенаст,  
 А в траве не видать.

「細くてのっぽで脛が長い」は雨の形容。この雨は草地に静かに降る雨のことだろう。

## 130 (雨)

(Дождь)

<sup>すね</sup>脛の長い大男  
 読経が上手

Велик, голенаст,  
 Грамоте горазд.

《これは雷をとまなう雨である。雷については「叫び、わめき、わけのわからない、賢者も知らないことばを話す」というなぞがある。ここでは雷雨が誰にもわからない（ということは、農民の理解し得ない）コトバを上手に話すもの、にたとえられている》(原註)。なお「読経が上手」と意識した原文の直訳は《読み書きが上手》である。

## 131 (雨と川)

(Дождь и река)

のっぽとのっぽが  
 拳固の打ち合い

Голенястый с голенястым  
 На кулачки бьется.

川の上にとびはねながら雨が落ちるさま。

## 132 (露)

(Роса)

美しい娘の夜明けが  
 もの乞いしながら歩き  
 涙を落した  
 月はそれを眺めるだけだったが  
 太陽は拾って行った

Зоря — зорница,  
 Красная девица  
 По миру ходила,  
 Слезы сбронила;  
 Месяц видел,  
 Солнце взяло.

「夜明けがもの乞いしながら歩き」はしだいに夜が明けてくる光景の擬人化。《このなぞはひじょうに詩的ななぞのひとつであり、編者サドヴニコフは〈露のしずくがここでは涙にたとえられているが、この詩的な表現はそのまま文学にとり入れ

られている。現代では露のしずくをダイヤモンドや宝石にたとえることがあるが、涙のたとえにくらべれば、それはじつに色あせたものだ、つくりものの感じだ」と言っている》(原註)。

## 133 (雪)

## (Снег)

降りるときは黙っている

Летит — молчит,

ねているときも黙っている

Лежит — молчит

死ぬときはわめく

Когда умрет,

Тогда заревет.

「死ぬときはわめく」は春の雪どけで河川が増水し、ごうごうと音たてて流れることをいう。なお「降りる」は原文では《飛ぶ》であるが、雪のことを考え「降りる」と訳した。

## 134 (野の雪)

## (Снег на полях)

白鳥が卵をあたためている

Белый лебедь на яйцах сидит.

「卵」とは土の盛り上ったところ、小高いところをいうものと思われると原註にある。小高い丘に雪がふりつもったさま。

## 135 (雪が降る)

## (Снег идет)

神さまが肉を召上るので

К божьему мясоеду гусей щиплют.

鶯鳥の毛をむしっている

## 136 (うす雪)

## (Пороша)

白いテーブル掛けが

Скатерть бела

地上にすっぱりかかった

Весь свет одела.

## 137 (とける雪)

## (Тающий снег)

毛皮が地上に敷かれている

Шкура лежит,

同時に水の方へ走っている

А сама до воды бежит.

雪は地面に接する下の方からとけて、その雪解水は低い方、結局は、川の方へ(「水の方へ」)流れてゆく。しかし雪自体はそのまま下へさがらただけで、その位置を動かない、それを「毛皮が敷かれている」と言ったのである。以上は原註による。

## 138 (生と死)

ひとりが走り  
ひとりが追う  
ふたりの力士は  
たたかっているのか？

## (Жизнь и смерть)

Кто бежит и кто гонит,  
два борца борятся ?

## 139 (死)

野に境界柱が立っている  
誰もこれを  
よけて行くことはできない  
王も<sup>きき</sup>后も美しい娘も

## (Смерть)

На поле тетенском  
Стоит столб веретенской ;  
Никто его не обойдет, не объедет ;  
Ни царь, ни царица,  
Ни красна девица.

《死は生命を断つ。それで人間の一生の終りには境界のようなものがあると考えられている。境界ということからそこに立つ境界柱というものが頭に浮んで来るのも自然である。このなぞにはなぞによく用いられる常套句が用いられている,「野」,「王」,「后」,「美しい娘」がこれである。そしてこのような人々でさえ死の前には無力だというのである》(原註)。訳者が寓目した室生犀星の文章に「何人もこれを拒絶することが出来ないということに死の面白さがあるのだ」という箇所があった<sup>32)</sup>が、これもこの辺の消息を語るものであろう。なお「王も后も美しい娘も」の句については 120 (空と星) のなぞを参照のこと。

## 140 (死)

神よりも低く  
王よりも高い  
神は死もこれを犯すことができないが、王は死に征服される。

## (Смерть)

Ниже бога,  
Выше царя.

## 141 (死)

見ていたつもりでも  
見たのではなく  
知っていたつもりでも  
知っていたのではなかったのか？

## (Смерть)

На что глядят — да не видят,  
Про что ведают — да не знают ?

## 142 (死)

## (Смерть)

解答のないなぞなのか？

Загадка без разгадки？

《以上ふたつのなぞは死に直面したとき、ほとんどすべての人に湧きおこる思想と感情にあふれている》(原註)。前掲の室生犀星は死についてさらに言う、「後悔の伴わない死は何処にもない、死というものはつねに後悔そのものの表現<sup>33)</sup>なのだ。」

## 143 (死, 年齢, 誕生)

## (Смерть, возраст и рождение)

ひとつは知らないし

Одного не знаю,

ひとつは見ないし

Другого не вижу,

3 番目のはおぼえていない

Третьего не помню.

## 144 (若さと老年)

## (Молодость и старость)

欲しいものは買えず

Чего хочешь — того не купишь,

要らないものは売れず

Чего не надо — того не продашь.

これは老齡者の歎きであらうか。「若さ」はいつも「欲しい」ものだ。

## 145 (赤貧)

## (Нищета)

焚く薪なく

Ни дров, ни свечей

ともすろうそくなし

Чем истопить печей,

右ポケットは断食日

В правом сочельник,<sup>34)</sup>

左ポケットは精進日

В левом чистый понедельник.

「断食日」または「精進日」というのはポケットが<sup>から</sup>空、すなわち、懷中無一文であらわす。

## 146 (書物)

## (Книга)

農夫でも農婦<sup>かみさん</sup>でもない人が

Идет ни мужик, ни баба,

餅でも饅頭でもないものを

Несет ни пирог, ни сгибень.

持って行く

「農夫でも農婦<sup>かみさん</sup>でもない人」とは原註によると僧侶を指すという。「餅でも饅頭でもないもの」とは書物のこと。ここでは聖書のことであろう。「餅」、「饅頭」と意訳した原語はそれぞれ «пирог», «сгибень» である。<sup>ピロ-グ</sup>пирог とは中身(肉とか野菜の煮たもの)の入ったパンであり(わが国でいうピロシキにあたる), сгибень は

同じピロークながら二つに折ったもののなかへ中身をはさんだものである。

## 147 (なぞ)

(Загадка)

顔もないのにお面をかぶっている Без лица в личине?

《なぞの適確な定義。「お面」とはなぞの本質をなす比喻をいう》(原註)。

## 註

- 1) В. П. Аникин : Д. Н. Садовников и его сборник загадок. (Предисловие к сборнику «Загадки русского народа»).
- 2) I. ドイッチャー, 山西英一訳: ロシア革命五十年 (岩波新書) 82ページ。
- 3) 戸板康二: 鈴木棠三著「なぞの研究」に対する書評 (『週刊読書人』, 昭和39年2月10付)。
- 4) 吉本隆明: 言語にとって美とはなにか (第1巻) 122ページ。
- 5) В. П. Аникин : Д. Н. Садовников и его сборник загадок. (Предисловие к сборнику «Загадки русского народа»).
- 6) В. Даль : Толковый словарь, ст. Рубаха, рубашка.
- 7) Клен — в говорах означал загривок, затылок, спину, загорбок. [Примечания В. П. Аникина к сборнику загадок].
- 8) «Черная гагара» — котел, гагарыш — горшок. [Там же].
- 9) тяскло というコトバは Даль にも見当たらないが, теселка? (=закал в хлебе, непечечное место) というがあるので, これより類推して訳文のとおりとした。
- 10) «Под дубком, карандышком», т. е. низкорослым, разумеется какое-нибудь растение. [Примечания В. П. Аникина].
- 11) 柳田国男: なぞとことわざ (現代教養全集, 7, 《日本人》) 45ページ。
- 12) ルナアル, 岸田国土訳: 博物誌 (白水社, 昭和17年刊) 220ページ。
- 13) ерепенить — бить, сечь, наказать телесно. [В. Даль : Толковый словарь].
- 14) Рой — поросята, здесь имеется в виду не только большое число поросят, но и то, что они недавно родились, отроились, как пчелы. [Примечания В. П. Аникина]
- 15) この謎の вариант (異文) は10以上もある。ここにかかげた露文はあるひとつのなぞの原文そのままではなく, 訳者が二つの вариант を取捨案配してもっとも代表的な形としたものである。
- 16) ここの露文も訳者が二つの вариант を取捨案配したものである。
- 17) Горох катыш, зеленый сушеный горох, второго разбора, крупный [В. Даль : Толковый словарь].
- 18) Лотком в Псковской губернии называли кровельный желоб или поток. [Примечания В. П. Аникина].
- 19) Чугунка — железная дорога. [Там же].
- 20) Пересыпка は「粉」のことと思われるが (В. Даль : Толковый словарь), 訳文では「屋根」との関係上, 「ベンキ」と訳した。



- 21) Загадка воспроизводит журчание ручья набором бессмысленных звуков :  
«чиратно — выратно». [Примечания В.П. Аникина].
- 22) Всяк кулик свое болото хвалит.
- 23) Шитовило — битовило — «загадочные слова, воспроизводящие залиvistое  
щебетание ласточек. [Примечания В.П. Аникина]. なお Шитовило — битовило は  
ツバメのなき声だけでなく、一般に鳥のなき声をあらわすとき、なぞではよく用いられている。
- 24) ルナアル, 岸田国土訳: 博物誌 (白水社, 昭和17年) 151ページ。
- 25) 鈴木棠三: なぞの研究 (東京堂, 昭和38年刊) 302ページ。
- 26) ルナアル, 岸田国土訳: 博物誌, 159ページ。
- 27) 前掲書, 193ページ。
- 28) 原文のはじめの2行は **страстная пятница** (キリスト受難の金曜日) という句の一種のパ  
ロディーであるので、とくに訳すことをしなかった。
- 29) ルナアル, 岸田国土訳: 博物誌, 196ページ。
- 30) 同上, 167ページ。
- 31) チェーホフ, 神西清訳: シベリヤの旅 (岩波文庫) 115-117ページ。
- 32) 室生犀星: 生きたきものを (中央公論社, 昭和35年) 84ページ。
- 33) 前掲書, 82ページ。
- 34) «Правый» и «Левый» — говорится о карманах. [Примечания В.П. Аникина].